

言

夢追い人

前県書道協会長の増田朴翠（本名作一）先生が、去る9月19日午前3時8分に死去された。80才の傘寿を目前にされてのことだった。この2、3年は闘病生活が続いていた。私が高齢で肝機能を害していた30年位前に先生も肝機能の数値が高かった頃、会うごときにきまり文句は「清野さん近頃どんげな」「先生は？」であった。

そんな無理の利かないお体で増田先生は絶えず二つの夢を追っておられたと思う。一つは県内の書道力のアップを図ることである。墨林会を率いて多くの人材を育てられ、それによって啓発された人も少なくない。他の一つは、自ら全国に打って出る「作家朴翠」としての挑戦である。

私の師であった故川上南暎先生（鹿児島大学教授、日展会員）がよく言われていたことと、増田先生の立ち場が重なってくるのだ。それは「遠隔地」の辛さである。中央書壇との接触が薄くなりがちで、実力がそのまま反映されにくい環境にあるからだ。ましてや、健康面も秀れない中で先生は常に「夢追い人」そのものであった。自分の理想とするところを求め続けられた。師にも次々と先立たれ不遇でもあった。ある時、先生が「この前上京して先生に面会するのに半日も待たされたよ」と言われたことが印象に残っている。

先生の書の基盤は王羲之・王鐸など行草書の古典からく

る強靱な線で縦横無尽に運腕を駆使した作風が、私の若い頃に接した書であった。溢れんばかりの気迫に圧倒された。その頃は私が呉昌碩を勉強していた頃で、作品で人を引きつける魂を教示いただいた。さらに先生の書は単体の行草書へと移行し、あの厳しさが内面に沈み、余白と風韻の利いた清楚さ、つつましさの書に変貌した。小宇宙の中で強靱な線と繊細な線が織りこまれ、交響曲のような構成に酔った。この時も私は楊守敬の行草単体書を勉強しており、単体作品の有り様を教示されたのである。最近では木簡や尺牘（手紙）を基にした大字書を見る機会が多くなっていた。氣宇雄大、雄渾な筆致は観る者を圧倒した。

先生は仮名においても、多くの古筆を体得された。漢字で鍛えられた強い線と仮名の流麗な線が融合し品格の高い仮名作家としての一面を確立された。

宴席でよく歌われたのが「無錫旅情」である。心はいつも書の原点である中国へ、そして王羲之や王鐸などの書家へ翔んでいたのである。漢字・仮名を問わず、決して表面的な華美に走らず、基本の上に立っての書韻高き書の展開を追い求められた。それはまさに人間朴翠の手柄そのもの。書は人を表わす…を地でいった生き様であった。体力が弱まる程にたくましい書を追い続けられた先生の気魄に敬意を表したい。夢追い人、朴翠先生は今も心に生きています。

県書道協会も中堅や若い世代が続いて頑張っています。先生お疲れ様、そして有難うございました。ゆっくりお休み下さい。合掌

（柏堂記）

卷

頭